平成２９年度第２回北杜市子ども読書推進計画策定委員会会議録

（１） 会 議 名：平成２９年度第２回北杜市子ども読書推進計画策定委員会
（２） 開催日時：平成２９年１０月３１日（火）午後２時～午後４時
（３） 開催場所：金田一春彦記念図書館　ことばの資料館
（４） 出 席 者：策定委員　溝口 たみ子／松村 雅子／柴山 裕子／山本 麻依子／佐野 恭子
桜井 彰一／横森 勝／田中 和美／浅川 希久子／進藤 わかな
中田 治仁／加藤 寿
教育委員会　井出 良司（教育部長）
事 務 局　坂本 あけみ（図書館長）／深澤 寛美・小野 まどか・相吉 悠（総務担当）

（５） 議題：１）アンケート結果について
２）「北杜市子ども読書活動推進計画（第三次）」の内容検討
３）その他

（６） 公開・非公開の別：公開
（７） 該当なし
（８） 傍聴人の数：０人
（９） 審議内容

議　題

１）アンケート結果について

＊事務局より資料をもとにアンケート結果について説明

委　員：５年前（平成２４年度時）のアンケート結果と大きく変わった印象はないが、前回よりも質問項目を増やして細かく調査したので、良いアンケート集計がとれていると思う。近ごろは電子書籍が出てきていて、スマホを使っている子どもが増えている。携帯小説を読んでいる可能性もあるのではないか。

委　員：せっかくこれだけのアンケートをしたので、配布枚数と回収率も載せたほうが良いと思う。

部　長：５年前のアンケート結果と今回の数値比較を示した資料の一例を用意した。このような比較表を作成し、これまでの計画の取組内容が適正なのか、成果があったのか知るのも良いと思う。表示の仕方について検討中のため、意見があれば伺いたい。今年度の数値結果だけを見てしまうと、数値が大きい・小さいと

いう判断しかできないので、５年前と比較することによって数値の増減の理由や背景の分析ができるようになる。

委　員：比較表があった方がと良いと思う。何年度との比較かということが明確にわかるようにしてほしい。

事務局：年度を入れて作成する。

委　員：同じタイプのグラフが年度で並んでいたほうが見やすい。質問項目が同じであれば、レーダーチャートにしてはどうか。

部　長：レーダーチャートはひとつの項目に対しての増減は見やすいが、全体が見えにくい性質もある。同じグラフを並べて比較したほうがわかりやすい。

事務局：今回のアンケートは委員の方々の意見を盛り込んで、前回とは違う質問も加わっている。前回と違う質問については比較表が載らないが、同じ質問に関してはグラフを並べて比較するということでよろしいか。

委　員：グラフが並ぶと見比べるという手間があるので、一目でわかるほうがいいのではないか。

委　員：円グラフでなく、全体に対する割合が示された棒グラフで比較してはどうか。

委　員：その方がわかりやすいかもしれない。

事務局：いくつかのパターンで見本を作成するので、次回の会議で選んでもらうということでよろしいか。

委　員：なるべく１枚の紙面上で比較できると良い。

委　員：アンケート中で子どもが興味のある本を聞いているが、「物語」「物語以外の本」と大まかな選択肢になっているが、具体的にどんな本を読んでいるか、もう少し掘り下げて質問することは難しいか。

事務局：細かく聞き過ぎると、回答を得られないことも考えられる。アンケートに協力していただくためには、これ以上質問を細かくすることは難しい。

２）「北杜市子ども読書活動推進計画（第三次）」の内容検討

＊事務局より資料をもとに「北杜市子ども読書活動推進計画（第三次）」について説明

※章ごとに検討

はじめに

事務局：本文の一部分を「原っぱ教育」について述べた文章に差し替える。

第１章　第三次計画策定の背景　について

・特になし

第２章　第二次計画における取組・成果及び課題　について

４　学校における取組・成果及び課題

事務局：（２）「朝の読書の時間の推移」で示しているグラフに、県のデータも追加して次回提示するよう考えている。

委　員：棒グラフの色の差をわかりやすくしてほしい。

事務局：承知した。

５　図書館における取組・成果及び課題

事務局：まず、前回指摘のあった点について回答する。金田一春彦記念図書館が平成２５年度に「子どもの読書活動優秀実践図書館・文部科学大臣賞」を受賞した理由が「ブックスタート事業」であるならば、図書館全体事業なので“北杜市図書館”の受賞ではないのか、という指摘についてであるが、金田一春彦記念図書館の受賞で間違いはない。この賞は市が特定の館を推薦するのではなく、県が各図書館の活動や実績をふまえて国に推薦するもので、県が県内各図書館の活動実績をもとに評価し、金田一春彦記念図書館のおはなし会やブックスタート事業等の実績が評価されたということである。

委　員：「ブックスタート事業」は市内全体で取り組んでいる事業であるのに１館だけが賞されるのは疑問である。

事務局：県には市内全図書館の事業報告を提出しているので、ブックスタート事業が市内全館で行われていることは承知されている。ただし、評価が市町村単位ではなく図書館単位であるため、“北杜市図書館”としてではなく、この年は金田一春彦記念図書館がピックアップされ、推薦対象になったということである。金田一春彦記念図書館だけがブックスタート事業に取り組んでいるという意味ではない。

委　員：ブックスタート事業に関わっている方たちは、金田一春彦記念図書館だけに関わっているつもりではないため、違和感があった。

委　員：ブックスタート事業を含めた受賞であるという見方をする。

委　員：「本の杜への招待状事業」の内容の中に、小中学校のアンケート結果についても書かれている。招待状事業は２歳児が対象なので、区切って記載した方が良いのではないか。

事務局：招待状事業での絵本の引換率とブックスタート事業以降の図書館利用率について関連付けをして述べた流れから、アンケート結果に続いている。

委　員：内容が多岐に渡り過ぎている気がする。「本の杜への招待状事業」についての項目ではその事業のことのみに留めて、アンケート調査については別のところに書いてはどうか。

部　長：文章の整理が必要。いくつかの取組に対してそれぞれ成果と課題を分析しているが、「本の杜への招待状事業」では広くまとめ挙げているふしがある。表記方法を検討するということでよろしいか。

委　員：承知した。

委　員：「学校図書館司書と公共図書館司書との連携」の中にビブリオバトルの全国大会優勝について出てくるが、「家読の推進」のページにも同じことを記載しているので、どちらか一方への記載でいいのではないか。

事務局：どちらに入れるか精査する。

委　員：学校司書と公共司書の対人的な連携についてはこの内容で良いと思うが、学校図書館と公共図書館の連携内容についても書いても良いのではないか。学校図書館と公共図書館をネットワーク化したことにより相互貸借も増えたと思うので、数値が示せるのであれば連携が深まったことがわかると思う。

委　員：４の学校における取組に記載するか、５の図書館における取組に記載するか、両方に関与しているものの記載が難しい。

委　員：学校での取組に入れても良いかもしれない。

委　員：公共図書館から借りた本を学校図書館で一度受け入れて、児童や生徒に貸出すこともできているので、そういうことも載せらえるとなお良い。

事務局：前回の指摘を受け、「障害のある子ども向けサービス」について、北杜市では現在未実施だが、今後の課題として取組んでいくことを新たに記載した。

委　員：もう少し具体的に内容を膨らませてほしい。

委　員："この障害に対してこうしたい" といった具体例を挙げてはどうか。

委　員：大型本や大活字本、障害を理解する本など、資料の充実についても書いてはどうか。

事務局：承知した。

部　長：全体を通して色々なアンケート調査の結果が出てくるため、どのアンケートのことを示しているのかわかりづらい。数値が出てくる項目があるが、その都度「〇〇〇アンケートでは…」と出てくるので、今回の資料に添付するアンケートのみを数値の参考にするなど、参考とする数値に統一性を持たせるともっとわかりやすくなると思う。

第３章　第三次計画の基本的な考え方　について

１　基本的な考え方

部　長：国が基本的な計画を作成し、それに従って県が基本計画を作り、それに沿って

市町村が計画を作っている。北杜市の計画の中で、国や県の計画に追従している部分と独自に取り組んでいる部分をこの章に書き入れてはどうか。

事務局：承知した。

第４章　具体的な方策　について

２　学校等における子ども読書活動の推進

委　員：学校では「家読」の呼びかけに力を入れている。「家読」をする人は増えているが、ある程度で伸び悩んでしまうのが課題である。公共図書館の利用率がなかなか上がらないこともあり、「家読」の“家族みんなで読書をする”という定義を広げようかと検討している。例えば、親子で公共図書館に行ってどの本を読もうか話したり、親が新聞を読んでいる近くで子どもが読書をしたり、親子で同じ本を読まなくても、“一緒に活字に触れること”を 「家読」とするなど、定義を柔らかくする。子どもから大人を公共図書館に誘うようになれば、公共図書館の利用にも繋がるのではないかと考えている。

また、「読書マラソン」が始まってから公共図書館を利用する子が増えた。地域の学校と図書館の連携事業によっては、子どもが制作した帯や成果物を公共図書館に掲示しているので、子どもが親を連れて図書館に足を運ぶこともある。読書マラソンから、こういった連携にも繋げていければ良いと思う。

会　長：八ヶ岳は、絵本ミュージアムが多い地域である。学校と公共図書館とプライベートの図書館を繋ぐのも一つの方法ではないか。北海道のある地域では「図書館探検」をしている。先生が課題を与えて、子どもはどこの図書館にその答えがあるかを自分で探しに行くというものである。課題という「ヒント」を与えて、子どもは半日や１日をかけて自分の行きたいところへ行って本を探すという冒険をしている。子どもたちには夢が必要で、活字を読むことは夢ではない。絵本を描いている立場としては、子どもに夢を与えたくて描いているので、どうしたら子どもたちが絵本で遊べるか絵本の中に入っていけるかを、どこかに入れてもらいたい。

事務局：検討する。

委　員：県で「家読」が推奨されていることもあり学校では力を入れているが、地域への呼びかけが不足しているのではないかと感じている。読書活動推進のために、具体的にこんな取組をしているということを公共図書館からも地域の人に周知してほしい。学校からも呼びかけているが、子どもが学校に通っていない家庭もある。サードブック等もしているが、日頃の「家読」の取組に継続されてないと感じる。学校においては、家族で読書することが今回の計画の要因に感じ

ているので、そこがもう少し伝わるような方策があると良い。

会　長：図書館情報誌「やまね便り」に、子どもたちの投稿のページがあっても良いのではないか。

委　員：発行頻度が減った経緯があり、内容の濃いものが載せられない。

事務局：現在は年に４回発行している。

委　員：安く仕上げて発行回数を２か月に１回に発行するなど工夫してはどうか。本の紹介が少ないので、「読書情報」の発信として図書館便りを活用できる良いと思う。大人向けと子ども向けに別れていれば、大人と子どもで情報共有もできるのではないか。

事務局：内容の工夫については検討の余地があるが、発行頻度については予算的な問題よりも職員負担の面で大変難しい。図書館事業の幅が広くなっている中で、職員数は増えないので一人一人の業務が過重になっている。子ども読書活動の推進活動においては、「やまね便り」の発行頻度を増やすのではなく、内容の工夫の方面で検討させていただきたいと思っているが、図書館職員と相談する。

委　員：発行元でまとめて印刷はするが、小学生・中学生・高校生にページを作成してもらってはどうか。

事務局：学校図書館との連携会議の中で検討する。

委　員：サードブックでは、本の配布ではなく本のリストを配布しているということでよろしいか。

事務局：そのとおりである。平成２５年度まではサードブックで配布するための本の購入予算があったが、事務事業外部評価により事業廃止となったため、現在はリストの配布に留まっている。

３　図書館における子ども読書活動の推進

委　員：障害のある子どもへの支援について、拡大図書の充実も良いと思うが、車椅子への対応などもできるようになれば良いと思う。

事務局：幅広い障害を対象にサービスができるような具体案を検討する。

会　長：障害のある子どもたちに絵本を与えることは重要な役目を持っており、保護者にとっても大切なことである。各出版社がビックブックや触って楽しめる本、音の鳴る本を出しているので、様々な子どもたちにフィットする本を紹介できるようになってほしい。

委　員：外国籍の子どもにも対応できる絵本や児童書があると良いのではないか。

会　長：地域に住んでいる海外の子どもたちが通っているインターナショナルスクールに、二か国語で書かれた本を与えるという事業が増えている。地域の行政機関だけで賄うことは難しいので、国連が力を入れている事業でもある。

委　員：多言語についても対応できるようになると良い。
委　員：点字と墨字の両方で書かれている本もある。障害のある子にはもちろん、正眼の子にも点字や障害について理解することができると思う。
事務局：計画書への記載方法や予算面も含めて、検討する。

６　数値目標

部　長：数値目標に掲げている「障害のある子ども向け拡大写本の所蔵数」は、除くべきではないか。特定の対象に絞られ過ぎている。
委　員：数値目標ではなく、具体的な方策の中に文章で入れたほうが良い。数値目標からは外す。
部　長：県の第三次計画にある障害のある子どもや在留外国人県のへ取組を参考にしながら具体的な方策に追記する。

委　員：数値目標の項目に「第三次推進計画期間中に達成が期待される数値目標」とあるが、“達成が期待される”という表現は安易に目標が達成されるような印象を持ったが、これらを目標に掲げた理由があるのか。
委　員：数値として結果が示せる目標を掲げている。
部　長：県が掲げている目標と比較できるもの、それに類似する目標を主に掲げている。

上記以外の意見

部　長：第４章の具体的な方策において、第二次計画と比較して、第三次計画における新しい取組や変わった点はあるのか。
事務局：基本的には第二次計画の継承であるが、第二次計画策定後に始まった「本の杜への招待状事業」に関することと「数値目標」の設定である。
部　長：北杜市独自の取組についても考えていきたい。

委　員：県の計画は県立図書館が作成したのではなく、県教育委員会が出しているのか。
部　長：図書館がやるべきことや学校教育がやるべきことなど多岐に渡るため、県の教育委員会として作られている。今回の北杜市の第三次計画も図書館や学校や地域、保護者も含めて、この先５年間の子どもたちの読書推進をしていこうという計画なので、市教育委員会として示す。表紙には「北杜市教育委員会」と記載される。

委　員：全体的に難しい表現が多いので、もう少し柔らかい表現にならないか。
事務局：検討する。

委　員:「市民団体やボランティアとの協働」がもっと潤滑にできると良いと感じている。自分が所属している地域以外からの協力を得たいときもあるが、どこに問合せをしたらいいのかよくわからない。

委　員：例えばブックスタート事業は市全体として行っているが、地域の枠組みを越えて協力することは意外と難しく、市全体のボランティアとして活動する段階まではまだ進んでいない。

委　員：学校行事のときだけでも、出張してほしい。

委　員：図書館ボランティアと学校の朝読書に行っているボランティアは所属が違う。

事務局：公共図書館として関われるのは、公共図書館に所属しているボランティアの方に意向を聞くことである。学校図書館との連携の中で、横の繋がりを模索することはできる。

会　長：実際に読み聞かせや人形劇の人材バンクを取り入れている地域もある。

委　員：生涯学習課の「まなびの杜」にも人材バンクが載っている。

事務局：市民団体やボランティアとの連携については精査する。

３）その他

・特になし

以上